

地域と大学の連携によるまちづくり ～「本妙寺桜灯籠(はなとうろう)」～

崇城大学 環境建設工学科 正員○村田重之
 建築学科 内丸恵一
 環境建設工学科 正員 渋谷秀昭

1. はじめに 3年前に熊本市内の花園小学校校区の住民から、校区のまちづくりを始めたいのだが大学も仲間に入ってもらえないかとの相談が持ち込まれた。以前から学生の下宿などで大学がお世話になっている地域でもありこのような要請には協力すべきであろうとの考えから、とりあえず筆者の一人が窓口になって、まちづくりに関心のありそうな学内の先生方に参加を呼びかけた。建築学科の先生方が参加してくれ地域との交流が始まった。

2. 花園町と本妙寺 花園町は熊本市の中心からかわず 2km 程度の位置にあり、自然に恵まれた静かな住宅地として人口が増加している。現在の人口は 12000 人である。また、町には加藤清正の墓所があり、本妙寺が菩提寺としてそれを守っている。本妙寺は日蓮宗のお寺で、500m の参道と胸突雁木(むなつきがんぎ)と呼ばれる 180 段の階段があり、その中央には 480 基の石灯籠がある。また、参道には桜並木があり両側には 15 のお寺が並んでいる。戦前は参拝する人々で年中人通りが絶えなかったとのことであるが、現在は 7 月 23 日の頓写会(とんしゃえ)と呼ばれるお祭りが年に一度のにぎわいを見せる程度で、普段は各お寺の檀家の人と日蓮宗の信者の人以外はそれほど訪れることもなく閑散としている。勿論、地域の人も本妙寺に対する特別な思いもなく、その存在は薄らいだままであった。当然、本妙寺商店街も郊外の大型店などにお客を奪われシャッターを下ろす店が増えて寂れてきているのが現状である。

3. 「桜灯籠(はなとうろう)」を中心にしたまちづくり 「ふるさと再生一億円事業」以来各地に町おこしや村おこしの自主的なグループが結成されて様々な取り組みがなされてきた。しかし、その多くは数年で姿を消してしまっている。その原因には様々な要因があると思われるが、一つには経済的な効果が伴わなかったことにあるように思われる。したがって、地域づくりにおいては常に経済的な効果をいかにして生み出してゆくかを念頭において進めることが必要である。筆者の一人は大分県の臼杵市において「竹宵(たけよひ)」と呼ばれる竹灯火の祭りを立ち上げて、それによって空洞化していた臼杵市の中心市街地に再び賑わいを取り戻した実績を持っていた。

2002 年 3 月 30 日(土)に「桜灯籠」と名付けられた第 1 回の明かりの祭りが本学の建築学科の教員と学生によって試行された。この祭りは、和紙で作った灯籠を参道や石段に並べてろうそくの明かりを灯し、また石灯籠にもろうそくの明かりを灯し、さらに主役の夜桜にライトアップをしたもので、皆がこれまで目にしたことのない幻想的な雰囲気のお祭りであった。また、琵琶や尺八などの演奏も行われ、幻想的な雰囲気をさらに盛り上げていた。第 1 回の「桜灯籠」は試験的なものであったから祭りに訪れた人は花園町の住民が中心で 2, 3 千人程度であった。しかしながら、この祭は地域住民に大きな感動を与え、翌年には地域と大学が連携して祭を実施することになった。

第 2 回の「桜灯籠」は 2003 年 3 月 29 日(土)に地域と大学が連携して実施された。今回は第 1 回の約 2 倍の規模を目標にして、和紙灯籠 2003 個と桜の木に吊るす竹と和紙で作製した吊り灯籠を 500 個作製した。和紙灯籠は各町内(花園町は 10 町内で構成されている)に 200 個を割り当て、各町内の婦人が作製した。吊り灯籠 500 個は地域の男性と大学の学生が協力して作製した。石灯籠のライトアップのスポットライト 200 個はジュース缶の廃品を活用して大学の学生が手作りで準備した。さらにオブジェと呼ばれる魅力的な作品が 3 箇所に設置された。和紙灯籠の中にはデザインを施したものが見られ、見る人に喜びを与えた。本妙寺の本堂で

はバイオリン、琴、琵琶、尺八などのコンサートが実施され、人々に潤いと安らぎを与えた。祭りの参加者は1万人以上に増えて人々に大きな感動を与えた。また、来年のこの祭りへの参加を申し出る人も現れた。資金は、花園町の自治会費、寺院からの寄付および大学の研究費でまかなった。

第3回の「桜灯籠」は2004年3月27日(土)にさらに充実した内容で実施された。和紙灯籠3000個と吊り灯籠を800個ほど作製した。オブジェは6箇所が増えて、これらは建築学科の教員、大学院生、学外の建築家が加わった作製された。花園小学校では、5年生が総合学習の一環として一人が一個の和紙灯籠を作製して祭りに参加した。本妙寺の本堂ではバイオリン、琴、琵琶、尺八などのコンサートが実施された。また、参道において自主的に歌唱をする人も現れ、人々に喜びと潤いを与えた。また、寺院の庭園において野点のお手前を企画して、参加者に日本的な安らぎと休息の場所を提供する寺院も現れた。祭りの参加者は去年の倍以上の2万人を越えたようである。資金は、自治会費、寺院の寄付、大学の研究費、さらに初めて地元企業からの寄付も加えてまかなった。さらに、宝くじ協会から補助金を受けたことで様々な備品を購入することができた。

「桜灯籠」の幻想的な雰囲気が話題を呼んで、昨年7月23日の頓写会において本妙寺の庭園内で「桜灯籠」のミニバンを開催することになり、ゆかた姿の老若男女が夏の夜の幻想的な明かりに感動していた。秋には熊本城のお城祭りにも飛び火して「みずあかり」と名付けられた明かりの祭りが開催され人々に感動を与えた。

今年の「桜灯籠」は3月26日(土)に実施することで現在準備が始まっている。今年は和紙灯籠やオブジェへの新たな参加者が現れ、また各種の演奏なども増加する見通しである。祭りの参加者も去年の倍以上が見込まれており、更なる発展が期待されている。

4. 今後の課題 3年間の「桜灯籠」の実施によって未知の人々とのネットワークが着実に広がっており、これが「桜灯籠」の大きな魅力であり宝であると考えている。また、この「桜灯籠」を起爆剤にして地域が活気付いてきていることも事実である。しかし、経済的な効果を生み出すまでにはまだ至っておらず、いかにして経済効果を生み出すかが今後の課題である。一つの案としては本妙寺の参道が将来都市と農村の交流の場になればよいと考えている。

5. おわりに 大学と地域が連携した花園町のまちづくりには各方面から注目が集まっている。まちづくりのノウハウを持った大学や研究者が地域と連携することで新しい形のまちづくりが芽生え、地域の発展にもつながる可能性がある。いま地域では大学との協働に大きな期待を寄せている。研究者が積極的に地域に出かけて地域の発展に汗を流すことが求められているように思える。

